サンドリの「伝える」活動

東日本大震災避難者の会
Thanks&Dream(サンドリ)の
「伝える」活動

東日本大震災
関西発
現地から伝える
「東北時の今」

図書館で大阪ボランティア協会『ウォロ』552 号を手にすると、写真の森松明希子さんによるサンドリ（東日本大震災避難者の会 Thanks & Dream）の活動紹介が掲載されていた。抜粋して紹介。

サンドリは、「避難者が主体的に活動し、支えて下さる方々へ感謝することを忘れず、避難者の『今』を真摯にお伝えすることによって社会貢献につながる活動を自発的・能動的に行う 3・11 避難当事者団体」（サンドリのホームページより）である。参加者は、東日本大震災、及びその直後に爆発した東京電力福島第一原子力発電所による原子力災害により避難を余儀なくされた人たちだ。「国内避難民（IDP）」という逆境にありながらも、必ず起こる次の災害で教訓として生かされるよう、当事者目線での気付きや自らの体験談を証言として残し、「伝える」ことをメインに日々発信を続けている。

ブース隊、おはなし隊、おんがく隊、学校に声をとどけ隊‥‥‥届ける先は、避難先の地域のイベントや学校、防災講座、そして国連（防災会議、人権理事会）も。常に意識してきたことは、「あなたならどうしますか？」という語りかけだ。災害は、いつでも、誰にでも、どこに住んでいても、そして何度でも起こりうる。災害からの「命の守り方」と「一人ひとりが大切にされ、尊重されること」を一番大切にし、「当事者自身がアーカイブ」をモットーに、草の根の活動を続けてきた。

多くの避難者は、社会の無理解・無関心などから「私は避難者です！」と周りの人に打ち明けられず孤立や困り事を解決できないでいる。本来誰にでも起こりうることなのに、「隠れ避難民」となり、家族や友人の理解すら得られず、言いたいことを言えずにいる人も少なくない。逆に、避難してきて良かったと安堵できたり、避難先で人の温かさに助けられたり、支援を受けられたりと、感謝の気持ちもある。全てを、談話、音楽、川柳など形態を問わず表現してきたし、前に出て伝えてきた。

抗いようのない社会全体の「風化」もあり、「いつまで言っているの？」と言われることもある。特に原発事故そのものへの無知・無反応に心折れそうになることもしばしばだ。ときには「風評被害を煽るな！」と怒鳴られ、「逃げた人は非国民だ」と揶揄されることも経験してきた。それらを見事にはね返し、経験に裏打ちされたコトバを 17 字で紡ぐ。そして、各地でのおはなし会や、子どもたちによる歌やスピーチで伝え続ける。災害時における命と尊厳を、次の災害に備え、さらに希望ある未来につなげられるよう、これからも 3・11 後を生きる全ての人々とともに守っていきたいと考えている。

（2019 年 1 月 31 日）